

# 伊那スキーリゾートからの東望

北澤夏樹(駒ヶ根市博物館専門研究員)



**山並** 赤石山地の主峰列を赤石山脈と呼ぶ。通称南アルプス。最高地点から手前の通称伊那山脈の頭と天龍川はほぼ一直線につながる。南アルプスが約200万年前より大地を西に傾けながら隆起を始めた経過を見ている。現在も1年で4mm隆起している。

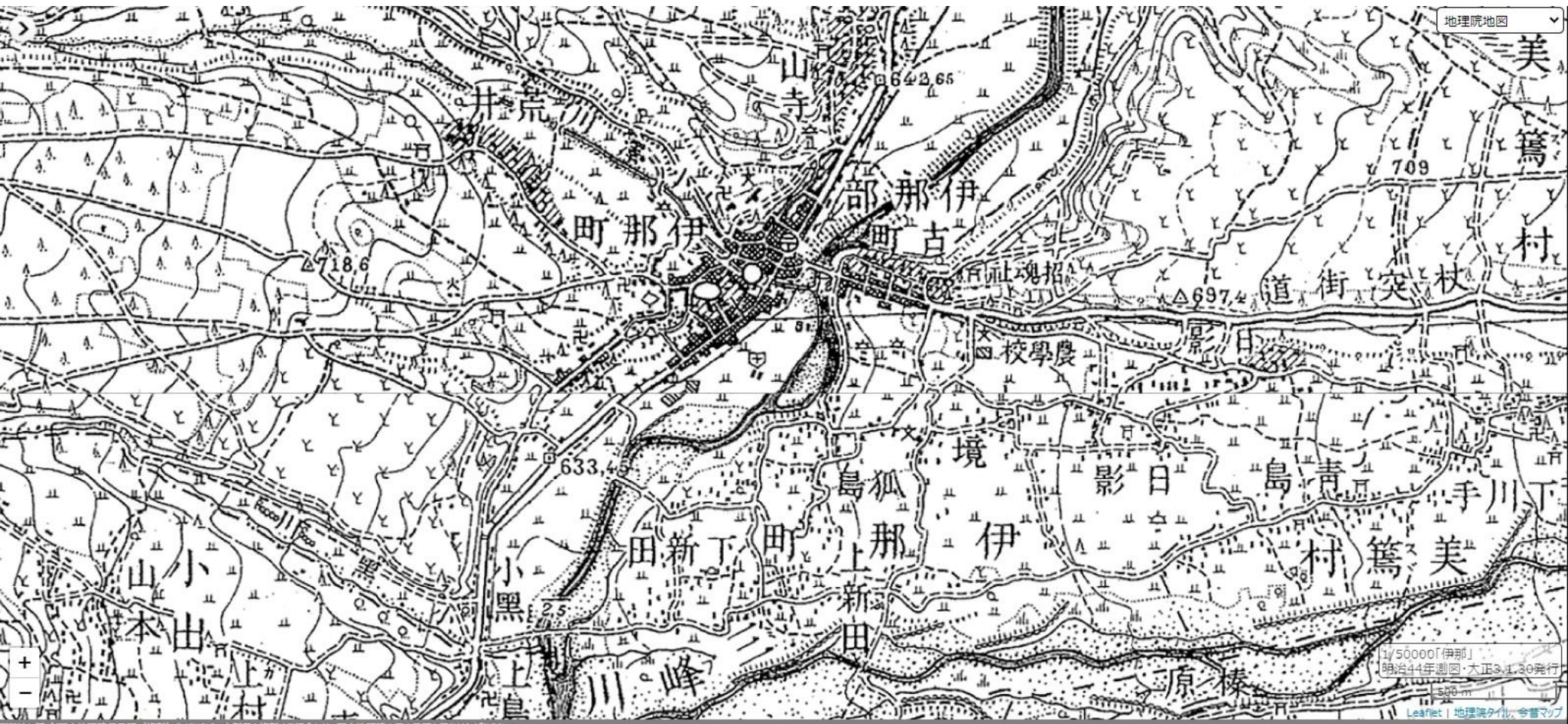
**三峰川** 十数万年前までは、三峰川がその流れを北は手良地区、南は富県地区を流れ、南アルプスから大量の土砂を運び、巨大な扇状地を形成してきた。その後、大地の隆起により三峰川が大地を削り、多くの河岸段丘を形成しながら現在の姿となった。

**河岸段丘** 大地の隆起によって河川は大地を削って下刻する。河川が運搬する土砂の量とそのときの河川の位置が関係して河岸段丘の形成がおこる。面白いのは三峰川の左右で段丘の数が違う。三峰川が大蛇のうねりのように大地をのたうちまわった結果を反映している。

**河床と流路** 天龍川と三峰川の川幅を比較したい。伊那市では圧倒的に三峰川の川幅が広い。なぜだろうか。また、天龍川は伊那谷の真ん中を流れているだろうか。実は西側を流れている。それは三峰川が天龍川を西に押し付けているためだ。

**一続きの大地** 眼下に広がる西春近の高台(天龍川の河床面より高い位置)と今いる大地との標高差は約200m。しかしかつては一続きだった！細ヶ谷グラウンド西に中央アルプスの隆起に関わる断層がある。

**板沢** 伊那スキーリゾートのゲレンデは人工ではない。南北を流れる戸沢川・小戸沢川の間は権現山東麓から大量の土砂が供給されて、板沢を形成した。80万年前から中央アルプスが急激に隆起にした結果である。



元スケール5万分の1/図郭「伊那」より/明治44年測図/大正3年発行

土地利用/河道-堤防-河川敷/飯田線-参州街道/杖突街道/学校/河岸段丘-坂道/橋

昭和22年 米軍撮影 航空写真



# 上牧古墳群



田畑駅

13号墳

12号墳

9号墳

8号墳

6号墳

5号墳

伊那北小



11号墳

10号墳

7号墳

長者屋敷遺跡



上牧公民館

4号墳 (浅間様の森)

八幡宮

城林公園

3号墳

土掘場



2号墳



芝垣外遺跡

鎮目の明神

マレットゴルフ公園

1号墳



古墳



古墳時代の集落遺跡



フットパス

0 200m



か み ま き こ ふ ん ぐ ん

# 上牧古墳群



## 〈上牧13号墳〉

この看板の後ろにある小高い山が、上牧古墳群の13号墳（有力者の墓）です。

上牧には現在確認されているだけで13基以上の古墳があります。

この13号墳は竜東地区最大規模で、直径22m、高さ2.7mの円墳または帆立貝形古墳です。

『伊那市史』には6世紀後半の古墳とあります。



上牧区文化財保護委員会



## 上牧の古墳時代の暮らし

上牧には、現在確認されているだけで13基の古墳が、上牧里山の遊歩道（フットパス）の周辺に点在しています。

### 上牧にはいつから人が住んでいたのか

そこで、上牧の古墳時代には、上牧の住人はどんな生活をしていたのか、いくつかの文献を参考にしながら想像を膨らませてみようと思います。

そもそも、上牧にはいつから人が住んでいたのか。上牧中部の「土堀場」からは7～8000年前の縄文時代の土器が発掘されているようなので、少なくともその時代から狩りをしたり天竜川で魚を取って生活していたことは確かなようです。

また、上牧南部のやや高台一帯は、芝垣外遺跡と呼ばれ弥生式土器が出ることから、2000年以上前から稲作を行いながら多くの人が暮らしていたことがわかります。

### 古墳時代の始まりと地方への拡大

では弥生時代に続く古墳時代はどういう時代だったのか？

古墳時代は3世紀から6世紀、飛鳥時代まででの約300年間といわれます。卑弥呼の時代、ヤマト政権の権力の象徴として、3世紀、奈良に出現した巨大な前方後円墳に端を発します。やがて、この中央政権の支配、経済圏が九州から関東にまで広がるにつれ、大規模な稲作の普及による生活の向上に合わせて、古墳造りは全国に広がっていきます。

古墳時代後期、6世紀から7世紀初頭には地方の豪族が権力を持つようになり各地で古墳が造られ、さらに地域の有力な農民が家長のお墓、一族のお墓としての古墳を造る力を持つようになりました。

### 古墳の小型化、地方の有力者のお墓へ

特定の人物の許された古墳が一般化したことで、古墳時代終末期の古墳は小型化し、前方後円墳から円墳や方墳となります。規模も、奈良県や千葉県に多く残されている代表的なものでも30m～60m、上牧にある最大の円墳も直径22m、高さ2・7mの大きさです。

一族の墓なので、年代を重ねると、狭いところに密集して造られ、多くの人が埋葬されることとなります。こうして、小型墳が集まる群集墳とよばれる古墳群を作ることとなります。

上牧の古墳も、この時代、約1400年前頃に、南部・中部・北部で盛んに造られています。

前方後円墳は全国で4700基が確認されているようですが、小規模の円墳・方墳は全国で15万基もあるとのこと。初期の前方後円墳は、埴輪や土器、装飾品や農具のお供え物が一緒に埋葬されましたが、後期の古墳では少なくなったようです。

## 古墳時代の上牧の暮らし

では、この古墳時代の上牧での暮らしぶりを想像してみます。

上牧の古墳はすべてが、上牧里山の遊歩道(フットパス)沿いに集中しています。これは、天竜川と同じ高さの場所は、川の反乱が頻発するので住むことは難しいと思われ(当時は堤防とかは全くないので)、しかし、稲作は水が必要で、川の周辺に田を作るため、一段高い河岸段丘のへりに沿って住居があり、川の近くの田を往復して生活していたのではないかと想像できます。そして古墳もここに造られました。これは、土器が出土している北部の「長者屋敷」、中部の「土堀場」、南部の「芝垣外遺跡」いずれも段丘のへりに位置することから分かります。

天竜川沿いの湿地帯で稲作を行い、川で魚を捕り、段丘上の家の周辺で栗やクルミ、ドングリ等の木の実を育て、山菜を取り、さらに奥の山でウサギ、キツネ、シカなどの狩りをする生活です。上牧は、その立地から、米プラス山の幸、川の幸、案外、食料が豊かな環境だったのではないかと思います。

## 当時の住居、食事、暮らしぶり

当時の住居は、一般の農民の場合は、弥生時代とほぼ同じような竪穴式住居のようで、15畳前後の広さに6~7人で住んでいたようです。さらにコメを保存する高床式の倉庫や家畜小屋が作られ、これらが数軒集まり1族を形成し垣根などで区分、この集団が集まって村を形成、協力して稲作や狩猟を行っていたようです。

当時の住居は、南箕輪村の大芝公園に復元住居がありますので、これで実際の住まいの様子を見ることができます。公園に行ったときは、ぜひ当時の暮らしぶりをご覧ください。

弥生時代は地面で火を焚き調理していたのですが、かまどが普及し始め、蒸し器などの調理器具も作られ、強い火力で、よりおいしく調理できるようになり、米は蒸して赤飯のようにして食べ、木の実のあく抜きなども行っていたようです。

13基の上牧古墳からは、当時の上牧の豊かな生活ぶりが見て取れます。

上牧の古墳時代に思いをはせながら、里山フットパスのウォーキングを楽しんでいただければ幸いです。

## 参考文献

『上牧の古い地名』(平成28年2月)、『伊那北小学校の歴史』(平成14年6月)